

## 「色」を詠み込んだ冬・新年の句に学ぶ(その2)

今瀬 一博

前回は、「色」を詠み込んだ冬・新年の句に学ぶ(その1)として、新年の季語を用いた作品を十五句紹介しました。今回はそれに続き、晩冬の季語を用いた作品を取り上げて、詠み込まれた色の効果を考えながら鑑賞してみましよう。

寒の月 白炎曳いて山をいづ 飯田 蛇笏

「寒の月」は、寒の時期の月です。「寒」の一字が効いているので、「冬の月」よりも硬く澄んで引き締まった印象を受けます。掲句は、夜更けの空高く掛かったものではなく、山の端から出はじめた「寒の月」でしょう。個人的には「寒の月」から「炎」や「曳いて」という言葉は思いつかなかったので、驚いた作品です。この「白炎曳いて」は実感に基づく真実の表現ですが、山を離れた後、更に輝きを増して昇ってゆく月の姿まで思わせませす。

寒風の土へ掘り出す紅蕪 福田甲子雄

この句の季語は「寒風」ですが、「紅蕪」の、特に「紅」という色の表現が一句を引き締めていると思います。「寒風」は、時に雪などよりも寒さを実感させますが、ここでは「畑」でなく「土」と言ったこともあり、寒々とした景に「寒風」が広がりをもたらしめます。その上へ無造作に掘り出した「紅蕪」は土を付けながらも色を輝かせていたでしょう。温かな紅色ではなく、寒さを際立

たせつつ冬野菜のしたたかさを感じさせる色と思います。

くれなゐといふ重さあり寒椿

鍵和田柚子

この句も同じ赤系統の「くれなゐ」色を詠み込んだ作品です。甲子雄句に対して、静かな作品です。この静かさは風も土も詠まず、「寒椿」だけに絞って、その重さを詠んでいる所為でしょう。詠み方は、「くれなゐ」の色自体に重さがあるような感覚的詠み方ですが、寒さの底に咲く「寒椿」の放つ色だけに納得できます。色から話題が逸れますが、全く違った趣で椿の重さを詠んだ句に、能村登四郎の「落ちる時椿に肉の重さあり」があります。

葛飾の鯉の黒さや寒の雨

野村 喜舟

この句は「寒の雨」の降る水底の「鯉の黒さ」に焦点を当ててますが、「黒さ」という色の効果で寒さに重さが加わる感じですが、「葛飾」という場所の設定も、効果的だと思います。喜舟と年の近い水原秋櫻子の句「葛飾や桃の籬も水田べり」から想像できますが、かつての「葛飾」は江戸川と荒川に挟まれた低湿地で水田の多かった所です。その「葛飾の鯉」まで濡らすような「寒の雨」。「鯉の黒さ」が一層際立って感じられたのに合点がいきます。

風花の大きく白く一つ来る

阿波野青歌

「風花」は冬の青空に雪が舞う天文現象ですから、その形容として「白」は当たり前。しかも青空なら白はいよいよ際立ちます。しかし掲句は、風花を一つ見つけた驚きに主眼があるので、こんな畳みかけるような念の入った表現も効果的です。現象としての風花ではなく、たった一つの風花の存在を認めた驚きの表現が、「大きく白く」です。寒さ、風、青空まで浮かぶ「白」です。

雪搔いて黄菊の花のあらはるる

高野 素十

雪の多い地方では、家ごとに門口や庭に降り積もった雪を搔き

除きますが、これが「雪掻」です。雪に覆われると見慣れた庭の景も一変し、置物や草花の位置も分からなくなり、掲句に詠み込まれた「黄菊」は、おそらく雪の重みで倒れていたのでしょう。もしかすると根雪のような状態の中から現れたかも知れません。雪の重さとともにしたたかな命の輝きを感じさせる「黄」です。

早梅の紅くて父と母の家

加倉井秋を

「早梅」は晩冬の季語で、春に先駆けて咲く、早咲きの梅のことです。この句はその「早梅」に対して、敢えて「紅くて」と、色を強調して表現します。早咲きの梅を訪ねることを「探梅」と言いますが、これは花が咲いていることを期待する心が主なので、梅の色に踏み込む必要はありません。一方この句は、父と母の家を訪ねた感慨が主なので、そこが探梅とは違います。「紅くて」がより一句の中で印象的なのも、そのためでしょう。

手囲ひの湯茶のみどりも春近き

岡本 眸

面白いもので晩冬の季語でも、「春近き」「春隣」のように、「春」の一字が入るだけで印象が変わり、春がもうどこかに感じられるような明るさをもたらします。この句にもそのような明るさが感じられますが、その明るい感じを動かないものにするのが「湯茶のみどり」です。「手囲ひ」は、手の中に収まる感じで、春の近さをより実感できますし、「湯茶」からは、改まった席でない気安さも感じられ、安らいでいる心が伝わってきます。

笹鳴の声のみどりにさす日かな

飯田 龍太

「かな」で止めた一句一章の句で、「笹鳴の声」を「みどり」と表現したユニークな作品です。警戒心が強い鶯は人前に姿を現すことを避け茂みに隠れているため、実際に姿を見るのは難しい鳥の一つです。笹鳴きが聞こえてくる茂み全体に晩冬の薄い日が

当たり、直感的にその声を「みどり」と感じたのでしょうか。まだ整わない野山の景の中、鶯の声もまだ調わずにぎこちなさが残ります。その声を表わす色としてこの「みどり」は動きません。

日脚伸ぶ夕空紺をとりもどし

皆吉 爽雨

寒の時期を過ぎて「日脚伸ぶ」を実感する頃は、単に昼間が時間的に伸びたというだけでなく、野山の景や空の色や匂いなどからも春の近さが察せられます。掲句はこの微妙な変化を「夕空」の「紺」で自覚したときに詠まれたと思います。「冬至」以来、徐々に回復してきた陽気を明確に自覚できた喜びが「とりもどし」にこもります。どこか温かく懐かしい「紺」だと思っています。

赤鬼は日本の鬼鬼やらひ

石田 波郷

掲句は「赤鬼は日本の鬼」という断定とともに、鬼の「赤」も一句の中で存外効いていると思います。年の押し詰まった感じとともに、強くて脆くてどこか親しげな「日本の鬼」を象徴する色として「赤」は動かないでしょう。強い悪鬼ではあるのですが、どこか「まつろわぬ」者の哀しさも湛えた、追われる日本の鬼。鬼の「赤」に目を留め「日本の鬼」と言い切った波郷には、日本の鬼の強さや哀しさへの共感の思いがあったかも知れません。

今回改めて、正月の句や寒さの底にある時期の秀句を鑑賞し、言葉一つ一つの無駄のなさを実感すると、より言葉に敏感に句を詠むべきであると感じました。「正月」や「新年」の改まった響きや寒さの底にある時期の感慨には、言葉の持つ豊かさや力に対して、私たちの感覚をより鋭敏にさせる何かがあるのかも知れません。そしてその際に用いられる豊かな色の表現は、一句を時に引き締め、彩り、そして明確に眼前に示す効果を発揮します。